

教育研究所だより

守山市教育研究所発行

平成27年8月27日 No.195 所長 奥西 光彦
守山市勝部三丁目9番1号 (守山市生涯学習・教育支援センター 愛称:エルセンター3・4階)
E-mail kyoikukenyu@city.moriyama.lg.jp Tel 077-583-4217 Fax 077-583-4237
H P <http://www2.city.moriyama.lg.jp/moriyama-kyoikukenyu/>

「ルシオール・アート・キッズ・フェスティバル」が目指すもの

守山市民ホール

総合プロデューサー 井上 建夫

今年の5月17日、4回目の「ルシオール・アート・キッズ・フェスティバル」が開催されました。今回、私は総合プロデューサーとして関わらせていただきましたが、特に重要だと考えたのが、市内各所でのキオスクです。キオスク（キヨスク）というと JR の駅の売店を思い出しますが、元来の意味は“あずまや”で、例えばヨーロッパの貴族の邸宅の庭にあったような小さな建物を考えていただければいいでしょう。こうしたあずまやでは、小さなコンサートが催され、お客たちが散策などしながら気楽に聞いていたことでしょう。フランスのナント市で始まった音楽祭「ラ・フォル・ジュルネ」では、ロビーなどで行われる無料の短いコンサートをキオスクと呼んでおり、「ラ・フォル・ジュルネびわ湖」の関連イベントである「ルシオール・アート・キッズ・フェスティバル」でもキオスクという名称を使っています。

今回の「ルシオール」では、市民ホールのロビーのほか、あまが池プラザのロビー、うの家、立命館守山中学校・高等学校メディアセンター、佐川美術館でもキオスクを開催しました。芸術作品との出会いで重要なことは、先入観に捉われず自由な気持ちで集中して作品に接することです。コンサートホールでクラシック音楽を聴こうとするとき、しばしば「敷居が高い」と言われるように、雑音を立ててはいけない、理解ができるか不安だ、といったことからくる緊張があり、これがクラシック音楽を市民から遠いものにしていきます。キオスクでは演奏者と聴く人が息づかいの聞こえる近い距離で、気軽に、自由に音楽を聴くことができます。しかも、短時間（20分）で無料です。演奏者にとっても聴き手にとってもリラックスした雰囲気の中で音楽を創り、また聴くことができます。

音楽をはじめ演劇、舞踊といった実演芸術（パフォーマンス・アーツ）は、見る人たち、聴く人たちが集まり、その集中力を高めた空間で、演者たちが、人間の身体と精神の可能性の限りを追求しながら、熟練や洗練、完成を備えた一つの作品として提示し、私たちが生きている現実を新しい目で視る契機にしていくことができます。優れた作品を見たあと、聴いたあと世界が変わってしまったように感じる場合があります。もちろん、これは世界が変わったのではなく、自分の感じ方、見方、聴き方、考え方が芸術作品から大きな影響を受けて変わってきているのです。一人の人間がその身体と精神、感性でもって素晴らしいことができることを目の当たりにすることで、自己への信頼を生み、勇気を持って現実と関わっていくことが可能になる。これは大人はもちろん、子どもたちや若い人たちにとって非常に重要なことでしょう。こう考えてみると、芸術は教育の機能を持っていると言えるのではないのでしょうか。

「ルシオール」では、コンサート、アート体験プラザ、まちなかマルシェにキオスクという多彩な催しを通じ、日常生活に近い場所で市民が芸術に気軽に触れることができ、これが守山の活力を高め、新しいまちづくりにつながると信じています。

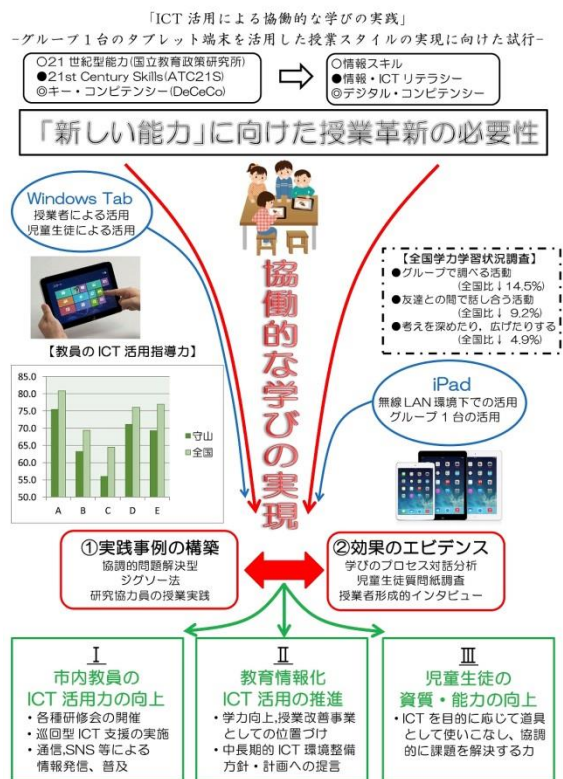
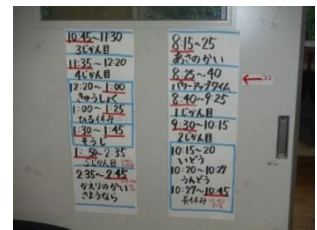
今年度の研究事業です。

教育に関する調査研究では、「特別支援教育の視点を生かした学級経営の在り方に関わる調査研究」です。「ユニバーサルデザインを取り入れた教室環境」に焦点を当てます。支援の必要のある子どもだけでなく、通常学級にいるすべての子どもが安心して、学習に取り組める教室環境の作り方を提案し、各校園に還元していくことを目的とします。

研究の流れとしては・・・

- ① 各校園での取り組みの現状を集約します。
- ② 先生方が教室環境を整備する上において配慮されていることについてアンケートをとります。
- ③ それらを分析し、「どこの子どもが安心して過ごせる教室環境」とはどんなものか、共通する考え方や見方を整理していきます。
- ④ 整理された考え方をベースに経験の少ない先生から、ベテランの先生まで同じように行える学級環境の整え方、「教室環境のスタンダード」チェックリストを作成します。

教室という「ルールのある空間」で、子どもたちが快適に過ごすことができるようにする支援や、「暗黙のルール」を視覚化する支援を「教室環境のスタンダード」として発信できればと考えています。



「ICTで何が出来る？」
 ではなく
 「こんな学びを実現したい、
 だからICTを活用する」

単なる機器の使用法ではなく、実践を通じた分析、検証を基に、新しい授業スタイルとなる先行事例を構築します。

子どもたちが自らタブレットを使い、自ら学び、自ら表現し、自ら協働の和を広げる

そんな学びへ向けた授業革新の一助となる実践研究を進めます。